

氏名	新田博衛 につ た ひろ え
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第143号
学位授与の日付	昭和55年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	藝術作品—構造と存在—

論文調査委員 (主査) 教授 吉岡健二郎 教授 辻村公一 教授 酒井 修

論 文 内 容 の 要 旨

芸術作品とは何かという問は美学ないし芸術哲学によって絶えず提出され続けられねばならない根本的な問のひとつである。

本論文はこの問に対し、Ⅰ「作品の成立」、Ⅱ「作品の構造」、Ⅲ「作品の存在」、Ⅳ「作品の受容」の四章に分けて答えようと試みている。

まず第Ⅰ章においてはフォルケルトの心理学的美学による創作過程の分析の紹介と、それに対する批判が展開されている。フォルケルトは1.創造の気分、2.構想・受胎、3.内面的推敲、4.外面的形成の四段階を区別しているのであるが、そしてかかる創作の段階的区別はそれなりの妥当性を有しているのであるが、本論文の筆者は創作活動を真に創作活動たらしめている力動的なもの、作品を現実の形態たらしめて行くエネルギーのごときものへの配慮がフォルケルトにおいては不充分であると考えている。創作の過程が或る時間的経過を伴うことは当然であるが、そこにおける各々の瞬間は直ちに創作の終極点と結びつくことによって相互に非連続的であり、各瞬間は互に明瞭に区切られている。筆者は創作における独自の時間性に注目することによって、フォルケルトの見解をより深めている。

第Ⅱ章「作品の構造」は三節に分けられ、(A)「アルノルフィニ夫妻像」、(B)「詩と音楽」、(C)「絵画空間について」の三部分からなっている。(A)と(C)はいわゆる空間芸術の問題を扱い、(B)は時間芸術を比較美学的観点から論じている。(A)はファン・アイクの傑作「アルノルフィニ夫妻像」の詳細な考察である。この作品はアルノルフィニ夫妻の肖像画であり、或るフランドルの室内画であり、当時のブルジョアの風俗画であり、そして婚姻の秘蹟を描いた宗教画である。これらの諸層は形成的意志によって統一されつつ一つの全体をなしている。この点の分析と総合はみごとである。

(C)はアルベルティとヒルデブラントを中心に据えつつ絵画空間の問題を論じている。これは同時に線遠近法の成立から、その解体までを扱うことになる。絵画というものが三次元の物体を二次元の平面によって表現することだと考えた時、アルベルティは絵画を視覚錐の切断面だと規定し、画面は壁に開かれた窓の如きものとなる。かかる視覚重視の態度は十九世紀末の彫刻家にして理論家であるヒルデブラントに至

って彫刻をすら絵画的に眺める立場に極端化する。筆者はアルベルティとヒルデブラントという二人の理論家の論文を仔細に検討することを通じ、西欧近代が視覚像優位の時代であることを間接的に、しかし逆にそれだけ大きな説得力をもって示している。

(B)は詩と音楽という通常時間芸術の名で呼ばれているものの共通面と相異面とを明確化することに当てられている。というよりはむしろ両者の根本的な相異、すなわち一方は楽音を用い他方は言語を用いることから生ずる意味上、構造上の相異が問題とされている。

第三章「作品の存在」も三節、すなわち(A)「本質存在と現実存在」、(B)「芸術作品の座標」、(C)「物・世界・芸術作品」から成っている。まず(A)において芸術作品はいかなるものとして在るかを問題として採り上げ、音楽を例としながら、演奏によって鳴り響く音となった限りにおける作品を現実存在としての作品とよび、鳴り響く音によって現象せしめられるところの作品そのものを本質存在としての作品とよび、この両者の緊張関係そのものが作品なのだとする。(B)においては芸術作品という物的なものが、記号、道具、有機体との比較検討を通じてその性格を露わにしていく。芸術作品が何らかの意味を表現しているという点では作品も記号的であるが、記号と比較して芸術作品は物質の層が意味を内在させているという点で記号における両者の結合の仕方の外面的であるのと根本的に異なる。また芸術作品と有機体とは、共に全体が部分に優先するという構造を有する点で共通するが有機体における各部分は相互的生産の関係にあるのに対し、芸術作品における各部分はそうではない。芸術作品の全体性とは自然の有機体とは異なった遊戯的世界の中での全体性とされる。つまり芸術作品は記号と有機体との中間に位置することになり、しかも記号的性格、有機体的性格を想像力の自由な遊戯の中で統合しているものということになる。(C)「物・世界・芸術作品」は第二章の三つの節および第三章の先行する二節をふまえ、これらをより深い、そしてより広い視点から総合しようとする部分である。われわれの生きている世界とはどのようなものであるのか。それは「コスモス」でもなく、また神の「被造物」でもなく、むしろわれわれの外にひろがり、そして計量化の可能な機械論的世界である。このような世界の中で人間は自己の身体性を原点として辛うじて自己に親しい、そして生きた世界をとり戻そうと試みる。そのような人間に親しい世界として芸術作品はある。それはとりとめもなく広がる地の上の美しい図柄のようなものとさえ言える。更に言えば機械的世界の中に人間的な環境を作り出して行くものとして芸術作品はある。芸術作品は世界の中の「小世界」にすぎず、大海に浮ぶ孤島のようなものにすぎないが、この「小世界」によって世界は活性化される。三次元の延長にすぎない空間は絵画や彫刻の空間となることによって自立した一つの空間となり、無差別な流れとしての時間は音楽作品によってはじめて秩序ある時間となる。芸術作品はカントのいう美的理念によって、目的論的世界の中で独自の場所を占めることになる。

第四章「作品の受容」は、第I章がいわば創作の問題を扱ったのに対し観照・享受の問題をとりあげ、全体の締括りとなっている。

ここではコンラート・フィードラーの鋭いが然しいささか偏った創作美学に対する批判が述べられている。フィードラーのように創作と観照を峻別し、芸術作品を理解しうるのは創作能力を有する芸術家のみであると言うなら芸術作品は単なる芸術家の独白になってしまう。観照とは創作活動そのものの追体験ではなくて、芸術作品の観照なのであり、観照の働き自身が常に創造性をもつのである。作品を前にした観

照者は演奏者なのであり、それができるのは観照者が自分の中に美的対象の力動的モデルを備えつけているからなのである。作品を観照するとは現実存在を通じて本質存在を探ることであり、対象の同一性を絶えず獲得し続ける営みに他ならないのである。

論文審査の結果の要旨

本論文の特色は以下の二点に存する。すなわち筆者は芸術とは何かという問を立てる代わりに、芸術作品とはどのようなものかと問うていること、次に空間芸術、時間芸術のどちらか一方に重点を置いて芸術作品の本質を問うというのではなく、むしろ両者を絶えず比較対照させつつ芸術作品の在り方を問う努力をしていることの二点である。

近代の美学はヘーゲル以後、芸術を中心として展開されてきたと言えるが、その場合創作の側に重点を置くか、観照・享受の側に重点を置くかの違いはあるにせよ、著しく人間心理の問題を重視する傾向を強めてきた。本論文の筆者は、芸術の本質追求に当ってまずとり上げられるべきは創作者や観照者の心理ではなくて芸術作品そのものでなければならないという立場をとっている。

芸術の本質は、それが本来的に在るところにおいて求められねばならないが、芸術の本質は芸術作品においてしか尋ねられ得ないと考えるわけである。芸術の本質が芸術作品の誕生以前に予め概念的に明確に規定されており、芸術作品はそれを単に現実化したものにすぎないとすれば、そのような作品は機械的技術の産物ではあっても芸術作品とは言えない。このような考え方はカントの「判断力批判」における根本的洞察に、必要な変更を加えつつそれを敷衍したものといえるが、現代の存在論的美学の傾向に副うものといえる。筆者はかかる基本的立場に基づいて芸術作品がどのような構造を有するかをまずファン・アイクの「アルノルフィニ夫妻像」を手掛りとして述べているが、その分析は先学の成果を十分に消化したみごとな叙述と言える。「作品の構造」と題された第Ⅱ章は、この「アルノルフィニ夫妻像」の如き一箇の作品を詳細に分析した部分と、絵画作品を構成する大きな枠組としての近代的絵画空間の問題を扱ったいわば巨視的な考察部分とが互いに補足し合い、しかも中間に詩と音楽との作品構造の比較がはさまれ、かくて芸術全般に渉る配慮がなされている。筆者が構造という語を用いる時、それは作品を内的に秩序立てている原理の事を意味しているのであって、作品を作品として明確化しようとする現代の構造分析の立場に近いと思われる。

第Ⅲ章「作品の存在」は筆者が最も苦心した部分と考えられる。芸術作品は単なる着想や想像のみの問題ではなく、物的となった精神そのものに他ならぬということから、筆者は芸術作品を現実的物質的素材を形成することによって本質存在との間の緊張関係を作り出すことだとしている。むしろ現実存在と本質存在との緊張関係そのものが芸術作品なのだ考える。筆者はこの考えを各芸術ジャンルに即して展開しているが、その叙述は筆者の芸術体験の豊かさを十分に窺わしめる。

第Ⅲ章の結びの部分で筆者は近代の機械論的世界の中で芸術作品が果たすべき役割の重要さと、芸術作品が存在すべき必然性とを説いている。ここで筆者は凡ゆる芸術作品の原点として人間の身体性の問題を据えており、それはそれなりの説得力を有しているのであるが、かかる考えを展開するに当ってはシュマルゾーヤメルロ・ポンティへの言及があって然るべきだったと思う。

以上本論文を読んでまず感ずるのは筆者が芸術の諸ジャンルについてそれぞれ深い造詣を有していること、次に常に具体的な作品に定位しつつ芸術の普遍的本質を尋ねようとしていること、第三に、そして最も重要なことであるが、分析と総合の能力にすぐれていることである。現在の日本の美学研究の水準からみて、本論文が卓越した地位を占めるものであることは疑う余地がない。

ただ次のような諸点、すなわち芸術作品を本質存在と現実存在、若しくは構造と存在という二面から考察するとき、両者をどのように統合するのかという点の説明が不十分であること、第三章での世界概念についての考え方が自然的、それも機械論的世界に傾きがちであり、歴史的世界が殆んど考慮されていないこと、そして作品受容の問題は創作に劣らず重要であり、且つ、創作に対して規定的な働きさえするものでありながら、その扱いが簡略にすぎること、これらの諸点の考察が更に深められれば、本論文の価値はより大きなものとなったであろう。しかしかかる不満を述べることは望蜀というべきであろう。

以上審査したところにより本論文は文学博士の価値あるものと認める。